

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 2 月 24 日

所 属：獣医学部 動物応用科学科

氏 名：大我政敏 職位：講師

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）
（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して
数行で説明する。（分量の目安：2～5 行（80 字～200 字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
動物生命工学	A	必修	2	137
動物細胞工学	A	選択	3	47
遺伝生命科学実習	A	選択	3	53
生物学実験	A	必修	1	172
基礎ゼミ	A	必修	1	172
専門ゼミ	A	必修	3	7
科学の伝達	A	必修	4	1

動物生命工学:

動物生命工学は動物応用科学の中で重要なウェイトを占める学問である。必修科目であり、動物に関する生命工学ということで、幅広い分野の基礎知識を身につけられるよう講義を行った。具体的には、細胞工学、発生工学、幹細胞工学の3つの柱について触れた。学生が興味を持てるように新聞記事やニュース動画などを都度紹介し、動物生命工学を身近なものとして捉えられるよう工夫しながら講義を行っている。

動物細胞工学: 選択必修ということではあるが、3年生では細胞を培養した経験のない履修者も散見されるため、細胞培養について動画を織り交ぜながら教科書と研究室での実際の間にあるギャップを埋めながら講義を実施している。本講義の目標は幹細胞を用いた再生医療について理解を深めることである。そこに行き着くために、培養細胞とはいかなるものかを丁寧に説明することから始め、最終的には再生医療について実に多くの事例を紹介し、先の講義との関連性を説明しながら講義を進めている。

遺伝生命科学実習:

生命科学の基本となる遺伝子発現の複雑さについて、組織特異的な発現を示すマーカー遺伝子を用いて、理解できるよう実習を行なっている。またさらに、DNA と RNA の分子の化学的な性質やその違いなどの理解を深められる実習を行なっている。

生物学実験:

遺伝子によって決まる形質についてアルコールへの耐性や味覚における受容体の個人差など身近に感じられる項目を扱い、学生により強い興味を抱かせられる実験を行なっている。

基礎ゼミ:

今後の人生において重要な教養となり得るかも知れないヒトの生殖医療に関する調べ学習を実施し、それぞれプレゼンテーションを行い、その後ディスカッションを行う内容でゼミを進めている。

専門ゼミ: プログレスレポートを行い、その内容について学生の理解を確認しながら指導を行うよう心掛けている。

専門ゼミ:

研究に着手したばかりの学生たちを相手に、研究だけでなく卒業後の仕事にも役立つスキルの習得を目標とした講義であることを説明し、自分の発表だけでなく、同僚の発表および教員からのコメントから学ぶべきことがたくさんあることをしっかりと理解させ、成長に繋げさせている。

科学の伝達:

最終学年ということで、昨年度1年間学んだことがしっかりと身につけているかを確認すると共に、その更なる発展を目指した指導を実施している。

2. 教育の理念 (育てたい学生像, あり方, 信念)

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。(自分の教育アプローチの説明: なぜやっているのか, 自らの信念, 価値, 目指すもの) (分量の目安: 8~12 行 (320 字~480 字))

- ・ 試験や単位のための勉強ではなく、大学生だけが許される自らの興味を追い求める学びの自由を存分に楽しむ。
- ・ 失敗から学び、失敗を成功に繋げる。
- ・ 生殖の不思議を探究する。

3. 教育の方法 (理念を実現するための考え方, 方法)

教育の目的と目標 (これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法) (分量の目安: 15~24 行 (600 字~960 字))

- ・ 講義の感想文の提出とそのフィードバックによる学生とのやりとり
- ・ グループディスカッションの活用
- ・ 教育的動画資料の多用
- ・ 小テストの実施
- ・ オンデマンド教材の活用
- ・ 質問をしやすい雰囲気と人間関係作り
- ・ 双方向のコミュニケーションを重視し、手間を惜しまない丁寧なレスポンス
- ・ 理解、納得を得られるまでの粘り強い説明

アクティブラーニングについての取組

一方通行的講義とならないよう、度々課題を投げかける。課題を投げかけることで講義内容について、自ら考える機会を設けている。良い題材だと判断した時、あるいは、学生たちの興味を強く引いたと感じられた時には、時間を十分にとったグループディスカッションの実施にも積極的に取り組んでいる。

ICT の教育への活用

講義で用いる資料および課題については、全てオンラインでのやりとりを行なっている。そのため、受講生はPCの知識が必要となる。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

- ①教育（授業，実習）の創意工夫（A）
- ②学生の理解度の把握（A）
- ③学生の自学自習を促すための工夫（B）
- ④学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A）
- ⑤双方向授業への工夫（A）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

5. 学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

双方向コミュニケーションとして、各自に質疑応答の機会（質問・感想文の提出）を与えた講義を実施したところ、かなりの好評を得た。理解するためのイメージを作り上げてもらうためにオリジナリティーを重視した説明を心掛けている。

②①の結果はどうでしたか。

テストの解答にも私の説明が知識の定着に貢献していることが見て取れる回答が散見され、効果がでていることが実感できた。

③②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

教員にとって、数十名の学生からの質問に逐一答えるのはかなりの負担となっているが、好評であること、また教員の独自の説明方法が学習に役立っていることが実感できているので、今後もただ継続するだけでなく、積極的に取り組む。

6. 学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

(参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。)

受講者に感想文を提出して貰い、疑問に感じたことなどを書いてもらうようにしている。質問疑問だけでなく、意義深い解釈などがあれば次回講義でレスポンスを行うようにしている。受講者側も感想文を提出しなくてはならないという緊張感を持って講義を受けられるようになってきていると感じている。また、理解できなかった箇所も気軽に教員に報告できるため、受講者全員の理解度の向上にも貢献している。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

講義を通じて、会話をすることができるようになった学生から、講義について感想を直接聞いたところ、「他の先生の講義よりとても面白い」という感想を聞かせて貰えた。特にご機嫌をとることでメリットがあるタイミングでもなかったのも、信じられる証言だろうと考えている。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況) (分量の目安: 1~2 行 (40 字~80 字))

オンラインで受講し、特に昨今は web tool を使った教育手法が多様になっていることを学ぶことができ、今後さらに積極的に利用していくことを計画中である。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。(分量の目安: 3~6 行 (120 字~240 字))

着任 2 年目ということで、まだまだ講義に関する自信と反省の両方を得る実り多い年であった。次年度はこの経験を元に、説明が分かりやすい、興味深いと言った長所を伸ばし、web tool を使いこなすのが苦手などの短所を克服する。また、頑張った学生とそうでない学生の評価に更なる工夫が必要であると感じた一方で、手間をかけすぎて効率が低下している面も見られたので、教員、学生ともに、効率よく学べるシステムの確立が必要である。長期的には、生命科学に強い興味を持たない学生にもその面白さを伝えられ、より多くの学生を魅了できる講義へと昇華させたい。

9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

シラバス